

## 北限のニホンミツバチ、 47年振りの生息確認

吉田 忠晴

ニホンミツバチ *Apis cerana japonica* は、東南アジアに分布するトウヨウミツバチ4亜種のうちの1種で、アジアの東端に分布圏を持つ、日本在来の亜種である。

現在、日本での自然分布域の北限は青森県の下北半島である。その分布記録は、本学の故岡田一次博士の報告によるものである。1963年7月29日に青森県下北郡東通村在住の石田惣作氏の案内で、カシワの樹洞にできたニホンミツバチの自然巣が確認された(岡田, 1963)。その後、北海道道南地方の調査を踏まえ、この記録が日本における最北限の生息地を示すものと述べている(岡田, 1985; 岡田, 1997)。

筆者は2003年8月1日～4日に東通村を訪れ、ニホンミツバチの生息調査を実施した。その際、石田氏にお会いすることができ、1963年当時のカシワの営巣場所を案内していただいたが、大木はすでに倒れ、根元部分が確認できるだけであった。またその後のニホンミツバチの生息に関する情報は得られなかった。ニホンミツバチの分布が見られない北海道には、人為的な持ち込みや採集の記録もある。そのため、筆者は北海道道南地域での生息調査を継続してきたが、自然巣は未だ見つかっていない。

東通村での調査から7年を経た2010年5月、石田氏から営巣の情報がもたらされた。早速、6月6日～7日に現地での調査を実施した。営巣場所は東通村の八幡宮神社境内のスギの大木の樹洞内であった。樹洞は広く、内部の巣板の様子は観察できなかったが、樹洞の入口からは働き蜂、また雄蜂の出帰巣が盛んに見られた。

営巣場所の発見のきっかけは、まだ残雪のある3月中旬、石田氏の体の周りを1匹の働き蜂



図1(上) 東通村八幡宮神社境内のスギの営巣場所、  
(下) 樹洞の入口から飛交う働き蜂と雄蜂

がまとわり付くように飛ぶので、その働き蜂の飛行経路をたどり、周辺を探索したところスギの樹洞に行きついたとのことであった。

1963年以来、日本での北限の寒冷な環境の中で、ひっそりと生きてきたニホンミツバチを47年振りに再確認できたことは感激深い。

### 引用文献

- 岡田一次. 1963. 日本養蜂新聞第71号 (S38.8.23).  
岡田一次. 1985. 遺伝 39 (10) : 58-68.  
岡田一次. 1997. ニホンミツバチ誌. 玉川大学出版部.  
86 pp.  
(〒 194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
玉川大学ミツバチ科学研究センター)